
国際健康開発 IHD

特定非営利活動法人(NPO)会報 24号 2024年(令和6年) 3月

はじめに

今回の号は江下優樹氏が、師として尊敬されている故駿河敬二郎先生について思い出を書いていただきました。その特集としてお送りいたしたいと思います。

牛島廣治

駿河敬次郎先生を偲ぶ

北海道大学人獣共通感染症国際共同研究所

江下優樹

人生の師である敬愛する駿河敬次郎先生は、2023年3月21日に逝去された。享年102歳8ヶ月であった。順天堂大学医学部を定年退職後、公立葛南病院、東京駅地下の八重洲診療所、そして御高齢にもかかわらず御自分で開院されたノアクリニックで、患者さんへの診療活動を長年続けられていた。本稿では、駿河敬次郎先生との出会いから現在に至る57年間、駿河先生が私の人生航路の羅針盤であった内容を回想した。

<駿河敬次郎先生との出会い>

当時17歳の高校2年生(1967年)であった私は、秋の修学旅行で東京に行った。その際に、お茶の水の外堀通りに面した順天堂大学本部棟の正面玄関の階段を降りてくる駿河先生に話しかけられたことから始まった。当時の私は、小倉市(現在の福岡県北九州市小倉北区)の旧炭鋤町で、小学校から高校時代を過ごした。高校時代の私は、長崎で造船技師になることを夢見ていた。進学

校ではあったが大学受験をあまり考えてはいなかった。しかし、唯一東京での受験を考えるようになったのは、駿河先生との偶然の出会いによるところが大きい。

修学旅行では、新大阪駅から開通したばかりの新幹線に乗って東京駅に到着後、最初の宿泊地はお茶の水の外堀通りに面した日本学生会館であった。当時の会館は旺文社が経営していた宿泊施設であった。夕食後、私は御茶ノ水駅近くまで散歩に1人で出かけた。山手線の国鉄電車が頻繁に通過しているのを外堀通りから眺めていたのを覚えている。10分ほど散歩してから学生会館に戻るために、歩いてきた歩道を後戻りしていた時に、声をかけられたのが駿河先生であった。駿河先生から後日聞いたところ、多くの修学旅行生が大学本部前を歩いているのを見かけたが、話しかけたのは江下君だけだよと言われた。順天堂大学本部棟の建物は、学生会館のほぼ隣の建物であることが後でわかった。その本部の正面玄関の階段から白衣を着た駿河先生が降りてきて、私とたまたますれ違うかたちになったので、駿河先生は自然に私に声をかけられたのだと思われる。当時の駿河先生は47歳であった。

私は学生服を着ていたので駿河先生から「修学旅行生ですか?」と聞かれた。「はい。」と答えて、その後少し話をしたように思われるが内容は詳しく覚えていない。駿河先生は夕食をされる予定であった。一緒に食事はどうですかと駿河先生に誘われた。大学本部と学生会館との間にあった建物の地

下への階段を降りた所にレストランがあった。私はそのレストランが学生会館の一部だと思っていたが、ネット情報ではどうも大学のレストランであった可能性がある。駿河先生は親子丼を注文された。私は既に夕食をすませているので、瓶入りのファンタオレンジソーダを注文した。食事中的会話では、当時テレビによく出ていた加山雄三さんの話をしたことを今でも記憶している。

夕食を終えた後、これも縁だからと話されて、順天堂大学本部棟内の駿河先生の部屋に案内していただいた。その部屋で、名刺を頂いて初めて順天堂大学医学部小児外科の教授であることを知った。その後、母校の東京大学の構内を案内してあげるよと言われて、タクシーに乗って、東大の赤門前で降りて、構内を案内していただいた。赤門から医学図書館まで歩いて行き、図書館受付で駿河先生が図書閲覧証を提示したおかげで、私は閲覧室を見学する事ができた。その後、三四郎池の畔を駿河先生と一緒に歩きながら、いろんな事を話された。お父様は金沢で産婦人科を開業していたので駿河先生も開業することを考えられたが、難病を治療するために大学病院に残って研究をしながらの臨床医を選んだと話された。医学知識の乏しかった高校2年生の私であったので駿河先生が話されたこと全てを理解できなかったが、やさしく話される先生であった。駿河先生と偶然お会いしてから、大学構内を案内していただいた時間を含めると2時間以上を私のために費やしていただいたことに、今更ながら感謝で一杯である。大学構内散策後、再び、駿河先生の教授室にもどり、東京に出てくるのならばご連絡を下さいと

話された。その後、私は宿泊先の日本学生会館にもどった。宿泊先に戻った私は、駿河先生という小児外科のお医者さんにあって東大構内を案内してくれた事を友だちに話したところ、その偶然の出会いに皆が驚いていた。

修学旅行から小倉に戻った私は、駿河先生から名刺をいただいたにもかかわらずお礼状を出すのを忘れていた。そうしたある日、駿河先生から手紙が到着した。東京に出てくることがあったら是非連絡をとる内容であった。この手紙がきっかけで、東京に行きたくなり、東京にある大学を受験することを決めた。当時は、自宅に電話機があることは稀であったので、近くのお店に設置されていたピンク色の公衆電話を借りて、私が玉川大学農学部を受験することを駿河先生に事前に話した。しかし、駿河先生宅への宿泊は迷惑になるのではと躊躇して、東京への出発間際になっても宿泊の件は知らせなかった。私は大学に近い宿泊場所として、よみうりランド内に当時はあった「地方学生ホテル」(その後、「よみうりランド会館」となったが閉館した。跡地には「読売巨人軍室内練習場」などになったようだ。)に宿泊する事にした。宿泊案内の情報は、おそらく大学の受験案内に掲載されていたと思われる。小倉から東京への交通手段は、民営化し前の国鉄(日本国有鉄道、JNR)の夜行寝台特急列車を利用した。宿泊場所を駿河先生に伝えていなかったのも、駿河先生の御家族の皆様が玉川大学近くの宿やホテルに電話をかけて私を探されたことを後で知った。第一日目の試験が終了して翌日が面接日だったので、私の父と一緒に面接を受けた。その日の夕方、「地方学生ホテル」に駿

河先生から電話がかかってきて、第一声は「江下君、探したよ！」と言われた。またしても、私の配慮が足らず、大変に申し訳ない事をしたと当ても反省していた。大学受験で上京したにもかかわらず、駿河先生にお会いする時間がなくて、お会いできなかった。大学から合格発表の通知と入学手続きの書類一式が私の手元に送られてきた。書類には、東京在住の保証人を記入する欄があった。東京には親戚がいなかったので、駿河先生に保証人となってもらう事を前提にして、保証人欄のみ空白の入学願書一式を駿河先生の御自宅に送った。さすがに、この時は、私自筆の手紙を書いたと思う。

<駿河敬次郎先生のいる東京での生活>

大学入学のために、これから東京で住む私ではあったが、東京のことは全く知らなかった。それで、大学構内に当時建てられていた梁山(りょうざん)塾という男子寮に1年間入ることにした。その後の3年間は、昼弁当の3食付で4.5畳一間の下宿を大学近くに借りて、農学部に通った。当時の梁山(りょうざん)塾の近くには朔風館という大食堂があったが、現在ではいずれも別の建物が建てられている。塾には舎監が1人住まわられていた。一部屋4名で構成されていて、1年生2名、あと2年生と3年生であった。初めての共同生活であり、学生による塾の行事がてんこ盛りで楽しい1年間を過ごした。

そのような塾生活の中で、数ヶ月に一度、塾の受付にあった電話機に駿河先生から電話がかかってきた。いつも少し早口で「江下君、元気？」から始まった。電話があるときは、いつも土曜日よりも前の日なので、土曜

日に順天堂大学医学部の駿河教授室を訪ねた。駿河先生の教授室を訪ねた際は、いつも健康診断をしていただいた。「夕食は何を食べたい？」といつも聞かれたが、私にとっては全ての食事が美味しかったので、いつも「何でも食べます」と答えていたように思う。時間に余裕がある時は、夕食後に映画を観につれていっていただいた。その後は、駿河先生の御自宅にお邪魔して、いつも泊まらせていただいた。当時は、駿河先生のお父様とお母様も御健在で、御家族の皆様から大変に良くしていただいたことに今でも感謝している。駿河先生の御奥様にはいつも美味しい手料理をご馳走してくださった。駿河先生と御家族の皆様には、感謝しても感謝仕切れない思いで一杯である。駿河先生の仕事柄、手術等で昼食が取れない場合もあることから、朝食をしっかりと食べられると、駿河先生が話されたことがあった。その習慣からか駿河家の朝食は夕食のように多かった。

玉川大学では学部を問わず、週に一度の礼拝の時間があり賛美歌を生まれて初めて歌った。愛吟集とポケットサイズの英訳付の聖書を購入して持参するのが常だった。私は仏教徒の家庭に育ったが、宗教に関わりなく著名人の講演を聴く時間でもあったので、スンナリと雰囲気溶け込んでいった。駿河先生はクリスチャンであった。駿河先生の御自宅を訪問するのはいつも土曜日だったので、翌日の日曜日の午前中に、教会に行って賛美歌を歌った。教会からの帰りには、近くの喫茶店に若い方達と一緒に行って、紅茶とケーキを頂いた。私とほぼ同年齢の方達と同席することが多かった。駿河先生は教会でも人気のある先生であった。

同じ順天堂大学医学部の学生さんも喫茶店と一緒に参加したことがあった。医学生の方1人が駿河先生に試験問題を尋ねる場面があったが、勉強していると簡単な問題ですよと駿河先生はさらりとかわされた。大学でも気さくな先生として学生さんに慕われているのだなとその時私は思った。また、12月24日のクリスマス・イヴに駿河先生宅に呼んでいただき、その夕方にクリスマス聖歌隊に加えていただいて、近くの教会の方達の家々を訪ねて、賛美歌を歌った。家の前で賛美歌を歌い始めると、家の明かりが点いたり消えたりした光景は、私にとって初めての経験で今でも記憶に残っている。

話は、少し前に遡るが、私の今の年齢は74歳である。現在この年齢の方達の多くは小学生あるいは中学生時代の夏休みの課題の一つとして、昆虫採集あるいは植物採集を選んだと思う。それが影響して、私は中学・高校時代は昆虫採集に没頭して、仲間と一緒に野山を駆け回っていた。大学の学部を決めるにあたって、昆虫が学べる農学部のある大学を探した。駿河先生にあったのがきっかけなので、大学は東京だけに絞って探した。当時は、現在のようにインターネットのない時代だったので、少ない情報量ではあったが玉川大学農学部にミツバチ研究室があることを知った。玉川大学には同じ敷地のキャンパス内に教育学部、工学部、商学部、芸術学部があり、また、同じキャンパス内に、小学部、中学部、高等部があった。現在は多くの建物は新しくなりネット上で鳥瞰図の動画があり、素晴らしいながめであることを最近知った。

大学での課外活動に参加するために、生物クラブを探したがなかったので、生物自

然研究会(現在の生物自然研究部)に入会した。しかし、昆虫以外はほぼ知らないことばかりだったので、研究会のおたく仲間から植物や野鳥の名前をたくさん教えてもらった。そのような中で、駿河先生のお部屋で話をしている時に、これからは英語を話せるようになったほうが良いと言われたので、大学では掛け持ちで英語クラブ(E.S.S.)にも在籍した。E.S.S.では、キャンプ座間など近傍の米軍基地に勤務する方々とその家族のための住宅が相模原市内にあったので、隔週毎に訪問して、アメリカ人の主に奥様方から生の英語を学んだ。英文科の仲間は英語を良く理解して会話していたが、全く訓練していなかった私は英会話の内容を理解することもままならなかった。しかし、度胸だけはついたように思われる。これをきっかけに駿河先生から教えてもらった、ELEC 英語研修所で週一回の英語教室にも通って、英語の基礎をおさらいした。英語を母国語とする先生から教えてもらう英語にはいつも新鮮味を感じることができた。しかし、日本語どっぶりの日常的な環境ではなかなか上達しなかったのも事実である。

農学部3年生になると研究室配属先を決める必要があった。躊躇することなく昆虫学研究室(通称ミツバチ研究室)を選んだが、卒業論文のテーマはまだ決まっていなかった。それで、駿河先生に会った時に卒業研究のテーマのことを相談した。「昆虫がいろんな病気をヒトに感染させるよ」、「同じ昆虫を研究するのなら、ヒトの命に関わる昆虫を研究するのもいいのでは?」との助言を駿河先生から受けた。私自身も、ヒトのためになるような研究はやりがいがあるのかもと思った。早速、農学部の図書室(図書

館の分室)で衛生害虫(佐々 学, 緒方 一喜(著)、岩波全書、234 ページ、東京、岩波書店、1960 年)の書籍を見つけた。その書籍を読むと、衛生害虫の中でも、ヒトの病気と関わりが深い昆虫として蚊が書かれていた。私は農学部生ではあったが卒業研究として蚊をテーマにした研究を漠然と考えるようになった。玉川大学は町田市の丘陵地帯にあり山林に覆われていたが、3 月頃の屋外での蚊の活動は時期的にまだ観察できなかった。しかし、農学部の花弁園芸研究室(当時の研究室名で、工学部の建物の前に建てられていた)の近くにかなり大きな温室があり、室内にはラン科の植物が冬でも花咲いていた。温室内の床には側溝があり鉄板で覆われていた。鉄板の一部を持ち上げると、温水がなみなみと側溝内に張り巡らされていて、温室内の温度と湿度を調節していた。また、温水の中を良くじっくりと観ると、蚊の幼虫であるボウフラが多数発生していることに気がついた。ボウフラを昆虫研究室に持ち帰り、成虫になるまで育てた。最初の成虫を実体顕微鏡の下で観察すると、成虫の体表には黒と白の鱗片で覆われたヒトスジシマカであることがわかった。蚊に刺されたことは何度もあり、また肉眼で見たこともあった。しかし、実体顕微鏡の下で拡大した蚊の成虫を初めて見たときは正直に言って少し気持ちが悪くなった。その後は現在に至るまで、このようなことは一度もなかったが、この蚊と一生つき合うことになるとは私自身も当時は思っていなかった。

大学 3 年の研究室配属が決まった後、昆虫研究室の岡田一次教授と卒論研究のテーマについて相談した。当時の研究室では、ミ

ツバチの王乳 (Royal jelly) をいろんな昆虫に与えて、それらの寿命延長や発育促進の有無などの生物試験を行っていた。岡田先生に蚊をテーマにした研究を希望したところ、蚊に王乳を与える研究を勧められた。しかし、医学的な研究はダメですよとも言われた。昆虫研究室には蚊の専門家はいなかったので、卒業研究のための実験計画は全て自分で立てた。蚊の書籍や文献を手当たり次第に読みあさりながらの暗中模索ではあったが、寝ても覚めても卒業研究の実験に没頭した 2 年間であった。大学の 4 年になっても蚊の実験をしながら、教職課程の単位も履修した。忙しくもあったが、充実した毎日であった。大学 4 年次の忙しい日々の中でも、駿河先生の教授室には時々訪問させていただいた(写真 1)。大学に提出した当時の原稿用紙は A3 サイズで、全て手書きであった。何度も書き直しをする必要があったので時間がかかった。ページ数に制限がなかったので、100 ページを超える原稿と図・表・写真を準備して、岡田先生に内容を確認していただき、農学部の事務室に無事に提出することが出来た。



写真 1. 駿河教授室にて
(1971 年 8 月撮影, 筆者大学 4 年)

<基礎医学研究者への道>

大学を卒業後、私は北九州市(1963年に小倉市を含む5市が合併)に帰る予定であった。しかし、研究室の岡田一次先生から研究者への道を助言された。そのときに、同じ研究室出身で、WHOから東京大学医科学研究所に戻ってこられた栗原毅先生を、岡田先生から私が大学4年になった最初の頃に紹介していただいたことを思い出した。医科研寄生虫研究部の佐々学教授を栗原先生から紹介していただいて、私は寄生虫研究部の研究生になることが出来た。私は、その1年後に北九州に帰る予定であったが、大学卒業3ヶ月後に帝京大学医学部寄生虫学教室の助手に採用された。この時は、私もまだ独身であったので、学生時代と同じように回数は少なくなったが、駿河先生とお会いして、教会にもいった。またその後、私が結婚する際は、ご多忙にも関わらず北九州市内の小倉城近くのホテルでまで来ていただいて、結婚式の仲人をしていただいた。結婚後は、駿河先生の御自宅に泊まることはなくなった。

私が帝京大学医学部寄生虫学教室に勤務していたときも、いつものお声で「江下君、元気？」との駿河先生の第一声で電話をかけてこられた。その後、私は帝京大学から久留米大学医学部寄生虫学講座、大分大学医学部感染予防医学講座に勤務先が移って東京を離れた。さらに、海外での長期研究生活が増えるにつれて、駿河先生とお会いする機会は少なくなっていった。しかし、久留米大学医学部外科学講座小児外科部門の溝手博義教授が久留米市内で学会を開催された際に、駿河先生は私の自宅まで来られた。また、1999年3月に福岡で外科学会があった

際にも学会場で駿河先生にお会いする事ができた(写真2)。



写真2. 福岡での日本外科学会にて
(1999年3月25日撮影)

大分県は、駿河先生との思いでの地でもあった。私が玉川大学を卒業した1972年の2月19日に、駿河先生は学会で大分まで出張されることになった。私の卒業記念と一緒に飛行機に乗ることを駿河先生が提案された。羽田空港から飛行機が離陸を始めると「江下君、大丈夫？」と言われて、私の右手首を持たれて脈拍数を測られた。私は生まれて初めて飛行機に乗ったので離陸直前に自分自身の体がふわ〜と浮く感じには何とも表現し難い感覚であったことを覚えている。無事に新大分空港(海岸に新設された新大分空港開港の数ヶ月後)に着陸した。その後、駿河先生と一緒に大分市内までタクシーに乗って国鉄大分駅まで送っていただいた。私は日豊本線の上り列車で小倉駅へ向かった。大学を卒業したばかりの私は、大分大学に勤務するようになるとは夢にも思っていなかった。

1999年12月から大分大学で勤務を始め

て、蚊が媒介するデングウイルスなどの研究を再開することができた。大分大学を退職後は東京にもどる予定であったが、退職の数ヶ月前に北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター（現在は、人獣共通感染症国際共同研究所）の杉本千尋教授が大分大学を尋ねて来られた。退職後は北海道に来ませんかとの誘いであった。誘いから1年程考えて、その話を進めていただく事にした。私の妻は孫娘の世話で東京に戻ったが、私は2016年4月から札幌に住み始めた。月に一度は東京に帰る予定であったので、5月の連休に、ノアクリニックを訪問して駿河先生に会うことが出来た（写真3）。

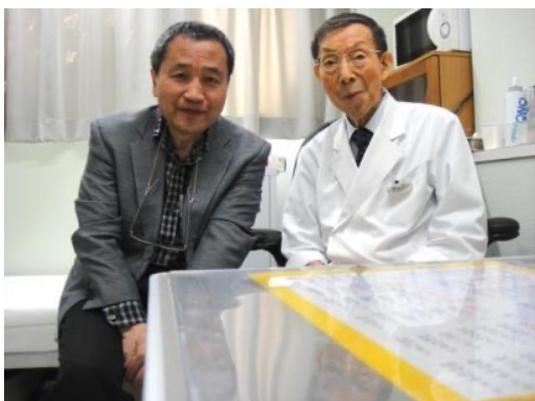


写真3. 駿河先生とノアクリニックにて
（2016年5月4日撮影）

札幌での研究生活は7年間続いた。若い研究者や大学院生と一緒にの研究生活は刺激的で良かったがそろそろ体力にも限界が来つつあったので、その限界前に東京に戻る事を決めていた。最後の1年間は2ヶ月に一度1週間ほど東京に帰り、札幌には7週間集中して研究の整理をした。研究所での私の使命は、研究所内にある媒介動物飼育施設を使って蚊を用いた実験を立ち上げる事

であった。大分大学退職後も外部資金を得ることができたので、飼育設備の充実、研究論文の作成にも役立った。リサーチセンター（その後に研究所）の部門毎の壁がほとんどなく、皆が集まって自由に研究の話をしていたのには驚いた。アフリカの国際動物病研究所（ILRAD）に2年間滞在したことがあるが、まさにその時の環境によく似ていた。海外からの多くの留学生と日本人大学院生から、斬新なアイデアと活力を私は得て、7年間を無事に過ごすことができ、楽しい研究生活であった。札幌での住まいはアパートメントホテルに宿泊していたが、新型コロナウイルスの流行で、ホテルは一時閉館となった。そのために、近くのマンズリーマンションに引っ越しをした。研究所の先生からホテル以外で心地の良い部屋を紹介していただいた。約2年間はそのマンションから歩いて18分の研究所まで、夏は自転車で、冬は大学構内を走る循環バスに乗って通っていた。極めて寒さに弱い私ではあったが、狭い部屋ながらもガス暖房で冬の室内は真夏のように暖かかった。冬に外出する際は、必ず外を歩いている人々の服装を確認してから身支度を調べて出かける毎日であった。

人獣共通感染症国際共同研究所での研究生活が6年を経過していよいよ東京にもどる決心をしている時に、駿河先生のことをふと思い出した。もしかしたらと思って、インターネットで駿河先生の名前を検索すると、2020年7月に100歳のお誕生日を迎えられていたことを知った。さらに、駿河先生のドキュメンタリー映像を作製する計画があることを知った。札幌から100歳お誕生日のお祝いのために手紙（2021年6月28

日付)を駿河先生に札幌から投函した。数日後に、駿河先生から私のスマートフォンに電話がかかってきた。いつものように、少し早口で「江下君、元気？」との元気な駿河先生の第一声を聞いた。その声は、私が小倉に住んでいた時、学生時代に塾で聞いた時の声と変わらない若々しい声であった。2023年4月に私が東京にもどる事を駿河先生に話したが、その電話以降、お話することもお会いする事もできなくなってしまった。私は月に一度あるいは2ヶ月に一度、札幌から東京の自宅に戻ってきていたが、新型コロナウイルス感染症の流行時でもあるので、訪問は控えていた。駿河先生が亡くなられたことは、順天堂大学医学部に勤務されている研究者仲間から、札幌に住む私宛のe-mailで知った。今から思えば、せめて電話だけでもかければと悔やまれてならない。

駿河先生と私との年齢は30歳程の差があったが、いつも同等に接して下さった。既に述べてきたように駿河先生に私は多くの不義理をしてきたように思っていない。今思いだしても、全てを許して下さっていた心の広い駿河先生に感謝でしかない。私の人生を実りある道に進めていただいたのも駿河先生である。私は大分大学を65歳で退職してから、既に9年が経過している。駿河敬次郎先生への恩返しはもうできない。私の年齢を考えるとこれからできることは少ないが、ヒトの役に立つことをして、恩送りができればと常々思っている。

駿河先生のことはしっかりと私の心に焼きついています。

駿河先生、安らかに天国でお眠り下さい。

駿河敬次郎先生と小児外科・小児科

牛島廣治

江下優樹氏のこれまでのご経歴と駿河先生との熱い交流を読ませていただき深く感銘しました。私自身は過去に数回駿河先生の講演を拝聴し、また研究会でお会いする機会があったような記憶があります。しかし個人的な付き合いはありませんでした。小児外科領域では、先天性胆道閉鎖症に対して駿河法という術式を考案されたことが記憶に残ります。また私の関係するロタウイルス感染症が先天性胆道閉鎖症の原因かもしれないと言われておりますが、マウスモデルでの証明はあるもののヒトではまだはっきりしていないと思います。

なお日本小児外科学会誌 59巻4号に宮野 武氏(名誉会員)からの追悼文があります(駿河先生のお名前を検索可)。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsps/59/4/59_733/_pdf

あとがき

本号に故駿河敬次郎先生の思い出を投稿したところ、牛島氏より駿河先生特集にしてはとの助言を受けた。また、原稿を読んでもいただき、特に東大キャンパス内のことについて助言をいただいた。駿河先生の御経歴については以下も参照されたい。

<http://www.jsps.or.jp/advice-for-medicalstudent>

(江下優樹)